札幌市教育文化会館情報誌「らく」

2010.6

22

楽

Sapporo Education and Culture Hall News

RAKU

兵隊作家と倉本聰

［特集］戦後10年から現代へと時代を紡ぐ舞台「歸國（きこく）」

札幌市教育文化会館

札幌市教育文化会館情報誌「楽（らく）」は舞台芸術を気軽に
楽しんでいただきたいという思いを込めて名付けられました。

特集

兵隊作家と倉本聰

戦後10年から現代へと時代を紡ぐ舞台「歸國」

戦中あるいは戦後、自らの従軍体験を元に書く「兵隊作家」と呼ばれる小説家達がいました。舞台「歸國」のもとになった小説「サイパンから来た列車」の著者・棟田博さん(故人)もそのひとり。日中戦争で重傷を負い除隊しますが、太平洋戦争時には従軍作家として、多大な犠牲者を出したことで知られるインパール作戦にも参加し、戦争の悲惨さを身をもって体験します。

しかし、棟田さんの作品は悲惨さを訴えるのではなく、どこか温かいものが多いとされています。「サイパンから来た列車」でも、戦地に赴いた人々がいかに戦争とは無縁の人達だったのかが、牧歌的な作風から滲み出ています。

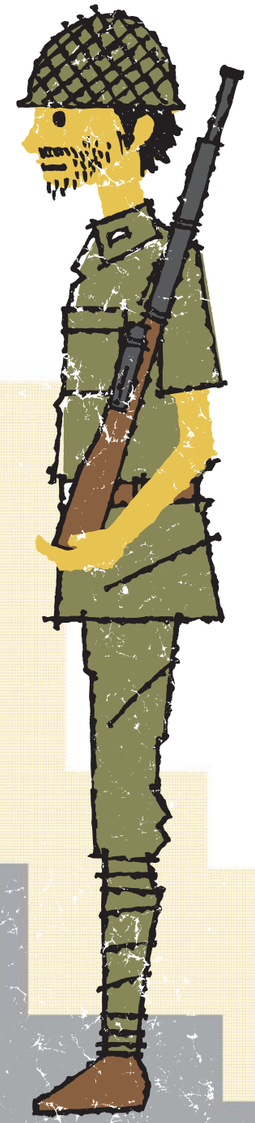
「歸國」の作・演出を担った倉本聰さんは、同書をあえて原作とはせずに"「サイパンから来た列車」をもとに"と表記しています。時代背景が変わり過ぎているため、棟田さんの奥様に許可をいただいて原作ではなく"〜もとに"と記しているのだそうです。

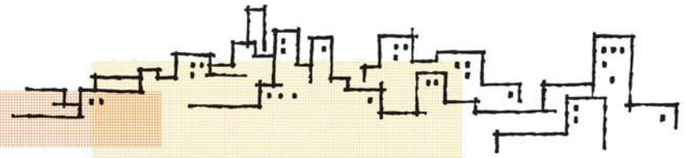
「サイパンから来た列車」が上梓されたのは終戦から約10年後の昭和31年。復興が叫ばれ希望を胸に多くの人が前を向いて力を合わせていた時代だったのではないでしょうか。一方、「歸國」の舞台は終戦から60年以上を経た現代。街にはビルが林立し豊かになったように見えますが、その代償に徐々に何かを失っているような気がしてなりません。

「サイパンから来た列車」の登場人物は幽霊も復興に生きる人も皆、誰かを思い泣き・笑い・怒る、人間らしさが描かれています。

「歸國」では、今の日本はどう描かれているのでしょうか。

太平洋戦争は遥か昔の事のようですが、まだほんの65年前のことなのです。





「サイパンから来た列車」のあらすじ

最終電車も出発し、人影の途絶えた夜中の東京駅。そこへ来るはずのない列車が到着し、ラッパの音と同時にどやどやと兵隊達が降りて来た。誰も彼も痩せ細り無精髭を生やし目だけがギョロつき、軍服は汗と泥と血でボロボロ。司令官らしき老少将の持つ水筒には弾孔が空き、蓋には秋吉善鬼と名前が記されてある。

その名前は、サイパン島で全員玉砕したはずの秋吉支隊の隊長名であった。つまり300名近い乗員達は全員この世の者ではなかったのだ。戦争が終わって10年の月日が流れ、愛する祖国や家族がどうなったのか見聞し、共に戦死した多くの魂に報告するため、一晩だけ日本に戻ってきたのだった。

各々、東京駅を出て自動車と衝突しながら(車側は何も感じてはいないが)、それぞれの目的の場所へと歩を進める。

老少将は皇居前の玉砂利に正座して、戦死した者達を祖国に眠らせてもらえないかと懇願しながら落涙した。新聞社から戦地に赴いた報道班員は勤めていた会社に戻り、仲の良かった同僚が自分の付き合っていた女性と結婚し、恐らく自分の子であろう子供と共に幸せにしてくれていることに胸を熱くした。そしてその後、事件の一報にワクワクして元同僚の取材についていくのだった。ある者はてっきり再婚しただろうと思っていた妻と、成長した我が子の2人だけの生活を見て、妻の肩をトントンと、手ごたえはないのに一生懸命に叩き続けた。他の者は、新橋のガード下で客をひく戦後が生んだ"新しい職業婦人"を観察したり、真面目だった友人が泥棒する場面に出くわして嘆くと同時に怒ったり。またある者は、靖国神社で他の地で戦死した戦友や元部下に会ったり、玉音放送を笑い飛ばす人達の会話にがっかりしたりした。

そんな中、ある大尉は共に戦場を駈けた愛馬に会い、こうつぶやいた。

「敗戦後10年の日本を見聞しに戻って来たが、こんなだらしない、腰の抜けた日本に用はない」。

午前四時。東京駅に朝一番の列車が到着する前に、幽霊となった兵隊達全員を乗せた列車は、ピーっという汽笛の音を残して、再び闇にのみこまれていくのだった。

富良野GROUP公演

「歸國」

作・演出 倉本 聰

時は現代。六十余年ぶりに帰国した英霊達。果たして故国の為に死んだ彼らが目にした現在の日本の姿とは――?

[日程] 8月3日(火) 19:00開演(18:30開場)
[会場] 札幌市教育文化会館 大ホール

料金 (全席指定・税込)

一般:5,000円(教文ホールメイト:4,500円)
学生:1,500円

[チケット取り扱い] 教文ほか市内各プレイガイドにて発売中。
[教文プレイガイド] tel.011-271-3355

富良野塾出身

太田工場長による コミュニケーションワークショップ

芝居作りに必要な、コミュニケーションづくりを目的としたゲームを行います。五感を使いながら、自分の持つ感覚を研ぎ澄まし、他者との協働作業による表現の楽しさを味わいます。18歳以上の方ならどなたでも参加できます。

[日程]
6月19日(土)14:00〜18:00
20日(日)13:00〜17:00

[会場]
札幌市教育文化会館 研修室401

「歸國」公演特別展示

『光芒』 — the rays of crepuscule— 楢原武正 × 斉藤幹男

作家 楢原武正(立体・平面)、斉藤幹男(映像)

「歸國」の劇中で描かれる"世代の違い"をテーマに、世代、作品素材の異なる2人の人気作家が作品を展示します。大きな立体作品と映像による、見ごたえ十分の内容です。

[日程] 7月29日(木)〜8月4日(水)10:00〜19:00
[会場] 札幌市教育文化会館 4階ギャラリー

[お問合せ・お申込] 札幌市教育文化会館 事業課 tel.011-271-5822

教文ワークショップ
Kyobun Work Shop

#01

演劇、オペラ、ダンス。知れば知るほど深まっていく舞台の世界。「観ているだけじゃつまらない」「実際に体験してみたい」そんな皆さまの好奇心にお応えするのが札幌市教育文化会館のワークショップです。

三人でひとつの人形を操る「三人遣い」。息の合った人形のあやつり方だけではなく、三人がスムーズに動ける立ち位置を探しながら稽古します。

SAPPORO×SAWA

フィギュア・アート・シアター役者養成講座

「注文の多い料理店」発表会

チェコを拠点に世界で活躍する人形師・沢則行による、3年計画の人形劇ワークショップが始まって今年で2年目。役者養成にとどまらず、舞台で使う人形や音楽を参加者自らが作り上げ、来年の本公演にむけて着々と準備を進めています。

人形と役者が一緒に舞台の上に立つ。影絵や人形浄瑠璃など、様々な表現手法をどんどん取り入れる。子供向けだと思われがちな人形劇の価値観を刷新する「フィギュア・アート・シアター」。人形劇が盛んなチェコの国立芸術アカデミーでフィギュア・アート・シアターを学び、世界中を飛び回って公演やワークショップを繰り広げている沢則行さんを招いて「フィギュア・アート・シアター役者養成講座」が2009年にスタートしました。3年計画で進行中の、全国から注目を集めているワークショップです。オーディションで選ばれ、講座2年目を迎えた参加者18名が今年目標にしているのは、9月に円山動物園で行う「注文の多い料理店」プレ公演。一体の人形を3人であやつる人形浄瑠璃特有の「三人遣い」を取り入れ、宮沢賢治の童話の世界を表現します。

4月に3日間行われたワークショップでは、公演で使う人形を制作し、最終日の発表会のための稽古に取組みました。決まったシナリオがあるわけではなく、稽古をしながら劇の展開を考え、最終的に発表できたのは「注文の多い料理店」の冒頭、わずか4分間で、人形も制作途中のものを使った発表会となりました。

「これから先何ができるのかはわかりません。今日作った4分間の内容が9月にそのまま採用になるとも限らないんです。その時、その場にあるもので作り出していくつもりです」と沢さん。

参加者にとっては即興的に劇を作り上げていく能力が問われるハイレベルなワークショップですが、雰囲気は和気あいあいとしています。

「特に誰が何、という役割分担はないんです。各自で得意分野を活かして自主的に作業をして、全体を全員で作っている感じです」と参加者のひとり。

わずかな時間の発表でしたが、これまでの成長とこれからの課題をかみしめる充実した時間となりました。

今年のプレ公演、さらには来年の本公演に向けて、沢さんと参加者の熱気は増しています。

SAPPORO×SAWA

「注文の多い料理店」in 円山動物園

日　程／平成22年9月17日(金)・18日(土)
会　場／札幌市円山動物園科学館(動物園内)

オーディションで選ばれた18名が、宮沢賢治作「注文の多い料理店」の不思議な世界を、沢則行の指導のもと、円山動物園で上演。大人も楽しめる、芸術的なこれまでに無い人形劇をお楽しみください。

音楽も、脚本も、すべて参加者が作り上げる今回の舞台。「僕が不真面目に見えるくらい、みんな真剣。やりがいがあります」と沢さん。